ISSN 2186-2273

京都ユダヤ思想

Journal of Kyoto Association of Jewish Thought

【巻頭言】 森岡 正芳 現実を想像する力

【論文】 菅野 賢治 日本軍政下の上海にユダヤ絶滅計画は存在したか（続）
—實吉敏郎・海軍大佐の未公開文書より—
長坂 真澄 想像力が向かう無限とその痕跡
—カント『判断力批判』のデリダによる読解から—

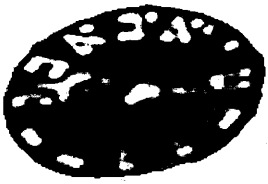
第 11 回学術大会シンポジウム

ヘルマン・コーエンにおけるユダヤ教—倫理・政治・科学

【基調講演】合田 正人 ヘルマン・コーエンにおけるユダヤ教—倫理・政治・科学—
【コメント】石崎 嘉彦 「回帰」は現代の苦境を超えゆく処方箋たり得るか？
佐藤 貴史 人間の哲学的発見—コーエンとローゼンツヴァイク—
後藤 正英 若きコーエンの哲学的出発点
林 晋 京大田辺文庫における二冊の *Prinzip* について
村岡 晋一 『ユダヤ教の源泉からの理性の宗教』における「理性の宗教」とは？

ユダヤ啓蒙思想とメンデルスゾーン 京都講演会
ミヒャ・ゴットリープ ドイツのユダヤ哲学が辿った二つの道：モーゼス・メンデルスゾーンとフランツ・ローゼンツヴァイク
シュムエル・ファイナー モーゼス・メンデルスゾーン—神話、歴史、宗教的寛容を求めるユダヤ教徒の闘い—

【書評】 堀川 敏寛『聖書翻訳者ブーバー』（評：田島 卓）
加藤 哲平『ヒエロニュムスの聖書翻訳』（評：新免 貢）



第 10 号 2019

〈論文〉

日本軍政下の上海にユダヤ絶滅計画は存在したか（続）
――實吉敏郎・海軍大佐の未公開文書より――

菅 野 賢 治

實吉文書の発見

筆者は、本誌前号に同じ主題で掲載した論考（菅野 2018）において、マーヴィン・トケイヤー、メアリー・シュオーツによる『河豚計画』（1979 年）に記されているように、1942（昭和 17）年の夏、日本軍政下の上海に駐日ドイツ大使館付警察武官ヨーゼフ・マイジンガーの梃入れによるユダヤ絶滅計画が存在し、それを日本領事館員（一部の記述では「副領事」）の柴田貢がみずからの職位を投げ打ってまで阻止した、というエピソードははたして史実に即しているのか否かを検証した。その際、筆者は、トケイヤー、シュオーツの共著をいったん知らなかったことにし、年代的にそれ以前に遡る記録や証言を分析しつつ、そこに乏しいながらも突き合わせることのできる状況証拠を添わせるという手法を採ったが、その結果、やはり『河豚計画』の記述はいかにみても現実味が希薄である、との結論に立ち至っていた。

すでにその時点で、紙幅の制約から、紹介、分析し切れなかった証言や状況証拠を補填すべく、続編の必要を感じていたが、原稿を提出した直後（2017 年 10 月）、ある奇跡的偶然から、すべて爾余の証言分析や状況証拠の突き合わせを無用の長物とせんばかりの決定的な一次資料を手にすることができた。すなわち、1942（昭和 17）年 4 月～翌 1943（昭和 18）年 6 月、前任の犬塚惟重・海軍大佐のあとをうけて上海海軍武官府特別調査部の部長をつとめ、ユダヤ難民用の指定居住区設置の陣頭指揮をとった實吉敏郎・海軍大佐（1886-1973）が、その関連業務の委細を、日々、刻銘に記した日誌と書簡が、實吉家の子孫のもとに完全な状態で保存されていたのである。

この實吉敏郎についても、前稿で採り上げた柴田貢と同様、これまで日本の内外を問わず、当人の戦後の足取りや一次資料の保存状態などを追跡した者はいなかったが、筆者は、2017 年春頃、イギリス在住の歴史家、伊藤恵子氏を介して、實吉大佐の子孫と連絡を取ることができた。伊藤氏は、2015 年、自身の両親の上海時代を日記体で再現する秀作を上梓したが（Ito 2015）、この著書執筆のため、2005 年、實吉敏郎大佐の三女・山本蔦子氏に、大佐の上海時代の思い出についてインタヴューを行ったのだった。

筆者自身が 2017 年に連絡を取った時、山本蔦子氏は、ご年齢ゆえ、すでに直接インタヴューを受けられない状態になっておられたが、代わってその令嬢、すなわち大佐の孫娘に当たる二宮道世氏が応対してくださった。そして、2018 年秋、二宮氏より電話連絡があり、関東某所の實吉家の本家から、大佐とその妻・英子（ふさこ）が残した大量の文書が発見され、自身が東京都内の自宅に引き取ってきたので、ご希望ならばそれをお見せする、とのことであった。期待に大いに胸をふくらませなが

ら、しかし、肝心の上海時代に関する資料は何も含まれていなかった場合の失望感も覚悟の上で、二宮氏宅に赴いた筆者は、そこで自身の目を疑った。まさに戦時期上海のユダヤ居留民対策をめぐって、實吉大佐自身の手による決定的な一次資料が目の前に横たわっていたからである。

具体的には――

（1）業務日誌――B5版、縦書きの赤罫線入り、左下方の欄外に「海軍」との銘が刻まれた用箋128枚を厚紙の上表紙、裏表紙で挟み、黒の綴り紐で括ったもの。1942（昭和17）年4月21日から翌1943（昭和18）年6月22日まで。實吉大佐自身による表題がほどこされていたとおぼしき上表紙が折り目から破れて遺失しており、かわって一枚目の用箋の上部に鉛筆書きで「昭和十七年　上海」とのみ記されている（以下「業務日誌」）。

（2）上海の實吉大佐と東京の妻・英子のあいだで交わされた手紙、多数。

（3）1942年の小型アジェンダ――英語表記で、ユダヤ関連業務以外の私事も綴られている（以下「アジェンダ」）。

（4）四穴のリングファイル――上海時代、ユダヤ教や現地のユダヤ人社会に関して学んだことを記したり、ユダヤ関連の会議に出席した際に備忘録として使ったりしたとおぼしきもの（以下「リングファイル」）

（5）「今後ノ在上海猶太人対策」（特調機密第四号、昭和18年4月15日）――業務日誌と同じ「海軍」との銘が入った用箋十葉。おそらくタイプ版が作成され、海軍当局に提出されたと思われるが、今日、防衛研究所、国立公文書館、アジア歴史資料センターなどにおいて、

その種の文書の痕跡は確認されていない。

（6）「上海」と記された小さな紙袋に入れられた十数枚の写真――うち、久保田勤、関屋正彦ら調査部嘱託や、アメリカのユダヤ支援組織「ジョイント」の現地職員ローラ・マーゴリスなど、ユダヤ関連の業務に共に携わった人物群が写っているものが数枚。

（7）戦後、久保田勤（1947年12月12日）、関屋正彦（同17日）が實吉に書き送った葉書、各一枚[1]。

（8）銀製のシガーケース――蓋の上に「To Capt. Saneyoshi / JUNE 1943」の文字と「SACRA（Shanghai Ashkenazic Collaborating Relief Association）」の紋章が刻まれたもの。内部には、實吉大佐自身ならびに三女・蔦子によるものとおぼしき数枚のメモが入れられていた。

なかんずく（1）の業務日誌は、数年来、筆者がその史実性如何を探求している事件、すなわち1942年の夏、柴田貢を巻き込み、数名の上海ユダヤ組織代表者たちの逮捕にまで発展した事件についてのみならず、翌1943年2月に設置されることとなる「上海無国籍避難民処理事務所」ならびに、その避難民が移動を義務づけられた「指定居住区」――いわゆる「上海ゲットー」――の成立過程を知る上でも、完璧なまでの歴史資料となっている。また、（8）銀製のシガーケースの中から見つかった實吉大佐自身によるとおぼしきメモ書きと、三女・蔦子氏によるものと思われるメモ書きの内容が、本研究の結論にもきわめて重要な意味を

[1] それぞれ「十二月十二日」「十二月十七日」との日付が記されているのみで、消印はいずれも判読不能であるが、別に発見された實吉・元大佐の「日記帳　昭和二十二年」中、12月14日（日曜）の欄に「午后久保田関屋両君をTeaに招く」と記されていることから年号も特定される。おそらく1947年に関屋正彦が上海から東京に戻ったとの報をうけて、三人の再会の場を設けたものと思われる。

もっているため、それについては本稿の末部で詳しく論じることとする。

七十数年の時間を超えて、今回、このような重要資料が発見されたことについては、ことごとく筆まめであった實吉敏郎大佐自身はいうまでもなく、家族の関係文書をどこまでも丁寧に保存する主義だったという英子夫人――旧姓・志賀、作家・志賀直哉の妹――、そして、それらの文書を三世代経た今日まで保管してくださっていた實吉家の子孫の方々に深く感謝せねばならない[2]。

實吉敏郎について

實吉敏郎は、1886（明治 19）年 11 月 23 日、鹿児島県の士族の出にして高名な海軍軍医、實吉安純（1848-1932）の次男として東京に生まれた[3]。1892 年、東京市立文海尋常高等小学校に入学するが、翌 1893 年、学習院初等科に転入。1905 年、同中等科を卒業し、海軍兵学校に進んだ。1909 年、兵学校を卒業し、海軍少尉候補生として「宗谷」に乗り組んで以来、数々の戦艦勤務を経ながら昇進。1916 年、海軍中尉の位にあった頃、学習院時代からの盟友であった志賀直哉の妹、英（ふさ）（1887 年生まれ、通称・英子（ふさこ））と結ばれる（二人のあいだに繁子、恭子、蔦子の三娘が誕生）。1921 年、大尉の位にあった頃、2 年間の英国私費留学を認められ、海軍駐在武官としてロンドンに滞在。イギリスの OCU（オフィサーズ・クリスチャン・ユニオン）聖書研究会に通い、キリスト教

[2] 今回発見された文書のうち歴史研究に資すると思われるものは、防衛省防衛研究所戦史研究センターと日本近代文学館への寄贈が決まり、現在、手続き中である。

[3] 以下、實吉敏郎の伝記情報については、今回発見された文書に含まれていた履歴書、証書、辞令類と、武田貴美による追悼記事「コルネリオ列伝（3）元海軍大佐　実吉敏郎先生」（『コルネリオ会ニュースレター』第 12 号、1974 年 7 月）、ならびに孫・二宮道世氏の回想による。

徒の英国人将校らと交わる（留学中、少佐に昇任）。1923 年末、帰国し、翌年、長崎でキリスト教の洗礼を受ける。1926 年から翌年にかけ、伏見宮・博義王（1897-1938）の遠洋航海に同行し、世界各国の港湾・海軍施設を視察。1927 年、海軍中佐、1933 年、海軍大佐に任ぜられ、1934 年には、1931 年ならび 1934 年の事変従軍の功績が称えられ、従軍記章を受章している。

太平洋戦争開戦を経た 1942 年 4 月 13 日、洋上勤務から一時戻った實吉（55 歳）は、犬塚惟重大佐（1890-1965）の後任として上海海軍武官府特別調査部部長を拝命し、同 18 日、東京発、20 日、長崎で「上海丸」に乗り、21 日、上海に着任した（翌 1943 年 6 月まで）。

ここで 1942 年初旬、それまで日本軍政下の上海におけるユダヤ政策を取り仕切ってきた海軍武官府特別調査部の長が、犬塚惟重から實吉敏郎に交替することとなった内部の事情は、いまだよくわかっていない。犬塚と終始行動をともにしていた新明きよ子（のちに結婚を経て、犬塚きよ子）は、そこに、犬塚が従来採用してきた親ユダヤ的な施策を快く思わない現地日本人たち数名（実名入り）の策謀の手を見て取っているが（犬塚 1982：436 以下）、これをそのまま海軍内部の人事の機微に直結させて考えることは難しかろう。当の實吉大佐は、上海着任早々、前任者の芳しからぬ噂に接しているが――

> 武官府で岡少将其の他に挨拶をする．何でも前任者犬塚と云ふ人は評判かぐわしくなく其の代わりにこつち［つまり實吉自身］をもつてきたらしい．此の人はユダヤ研究家でサツスーン財バツなどについて相当の知識があるらしいが今日其の人の書いたものを見たら少しをかしい処もある．何でもカセイホテルに泊つて（事ム所もそ

こ）ぜいたくをやり金を貰つたと云ふデマもあつた由．参謀長其の他関係者の此人に対する評バンは悪い．一等ホテルで二室使つて居ると云ふのは此の人の事らしい（妻・英子宛書簡、1942 年 4 月 21 日、以下すべて［　］内は引用者の加筆、注解）

これを、そのまま史実として鵜呑みにするのも性急に過ぎよう。

確かなことは、日米開戦を境に犬塚時代から實吉時代へ移行した海軍武官府特別調査部には、ユダヤ政策について、申し送り事項や一貫した原理原則がこれといってあったわけでないということだ。おそらく、上海にユダヤ系の資本と技術者集団を誘致することで、中国の支配地域における戦時経済の活性化と同時にアメリカ世論における対日感情の軟化をも狙うという、犬塚大佐の一石二鳥的な「ユダヤ利用論」が、1941 年 12 月、真珠湾攻撃により存在意義を失い、以後、既存の上海ユダヤ居留民を、敵性ならずとも決して野放しにはしておけない外国人集団として監視、統制していく業務に、新たな人材の登用が望まれた結果だったのであろう。その際、ユダヤ教と同根のキリスト教を信仰しており、2 年の在英経験により英語もきわめて堪能であった實吉大佐に、自然と白羽の矢が立てられたものと思われる。

實吉敏郎（1886-1973）
写真提供：山本蔦子、二宮道世

そして実際、實吉は、久保田勤、関屋正彦、ほか三名の嘱託を部員とし、持ち前の英語力を遺憾なく発揮しながら上海ユダヤ居留民に関する施策を進め、1943 年 2 月、「上海無国籍避難民指定居住区」ならびに「上海無国籍避難民処理事務所」を設置し、後者の所長として久保田勤を据えたところで、みずからは 1943 年 6 月、ふたたび洋上勤務に戻るべく、上海を後にした。

1943～44 年、「南海丸」と「南洋丸」に乗り組んで洋上勤務を果たし、1944 年 10 月以降、横須賀の軍需部で地上勤務に当たっていた折に終戦を迎える。

1945 年 10 月（58 歳）、海軍省を退いた後、日本 OCU の顧問をつとめるほかは鎌倉の私邸に蟄居し、趣味のスケッチと畑仕事を楽しみながら、妻・英子ともども静かな余生を過ごしたという。1973 年 3 月 4 日、86 歳で永眠。

1942 年夏の出来事

本稿では、今回発見された實吉文書のすべてを紹介し、そこから得られる情報を網羅することは不可能であり、特に 1943 年 2 月、「無国籍避難民指定居住区」の設置に漕ぎ着ける過程については稿を改めて報告せねばならないが、少なくともこれらの新資料から、1942 年の夏、柴田貢と上海ユダヤ組織代表者たちを巻き込みながら起きた「事件」の真相を十分に窺い知ることができる。

（一）業務日誌より――

［一九四二年七月］二十八日［火］

武官府　ペルリツより猶太人を一地に移す風評ありとて抗議書の如きものをよこす

［七月］三十日　［木］　華氏九十四度

ペルリツに戒告を与ふ（久保田氏）　大陸新報記者脇本照二を呼び猶太人工作問題漏洩の事実を確む

八月一日　土

〇九〇〇　ペルリツのオフィスに至り見る　同人不在．一〇三〇領事館猶太人対策連絡委員会　秘密漏洩に対する警戒

猶太人移動問題

八月三日　月

武官府連絡会．午后一時　トパス、スピールマン、及びペリッツ憲兵隊に拘留せられし件につきアシケナジ猶太人 Cohn（日本生レ）、Kopetiovich、Ashkenazi、Fein、Rabinovich、Adomeshelsky 来ル

八月四日　［火］

午前憲兵隊に行く．Topas Speelman Peritz 拘留の理由（秘密漏洩に関する事）訊ぬ

八月五日　［水］　武官府事務所机上　摂氏［ママ］97°

武官府　移転問題協議　本日風無く暑気強し．

八月六日　［木］　一〇〇度

上海猶太人対策実行案草案（久保田氏）出来る

（二）英語表記のアジェンダより――

Mon. 27. [1942]　Bukanfu. Topas came. Peritz came.

Tues. 28. Peritz informed us that there was a rumor that the Jews are

going to be restricted.

Thurs. 30. Bukanfu. Peritz came.

Mon. 3. Bukanfu. Usual meeting. 5 Ashkenazi Jews called on us concerning Topas Speelman + Peritz's detention at Gendarme's office.

Tues. 4. Visited Gendarme station in the morning.

Fri. 7. Visited Gendarme's office + Jewish Gemeinde office.

（三）實吉が東京の妻・英子に宛てた手紙より――

七月二十八日　午前司令部．Jew に圧力を加へる仕事は気持のいゝ仕事ではない．今日もえらく暑い．

七月二十九日　武官府午后一時　暑い盛りに両嘱託を伴ひ自働車［ママ］で猶太人収容所二ヶ所を見てまわる。実際憐れなのを見ると気の毒になる

七月三十一日　九十六度　［・・・］夜八時半予め小林君にウエイサイド方面の猶太視察の案内をタノミ　新アジアホテルに行き両嘱タクをつれて電車ででかける．猶太人の生活振りや支那の下層民の町を見せる．

八月四日　晴［・・・］ケンペイ隊に行つたり両老を連れ楊樹浦方面の警察に行つたりする．両老今の処見当がつかないので心配して居る．ヂウ問題も中々簡単でない．

八月七日［・・・］三時頃暑い中を自動車でケンペイ隊と猶太人の事ム所に行く．ケンペイ隊の将校の処はフアンも無く猛烈に暑い．

最後の英子宛書簡では、説明が煩瑣になると感じたのか、實吉はユダヤ組織代表者たちの逮捕騒ぎに言及せず、代わって「両老」（久保田、

関屋両嘱託）の戸惑いと先々に対する不安感を描き出している。

ここですべてに先立ち、實吉大佐が残した記録には、トケイヤー、シュオーツの『河豚計画』以来、「事件」の中心人物と位置づけられてきたヨーゼフ・マイジンガーはおろか、他のＳＳ将校などの名前も、全体をつうじてただの一度も登場しないという点に留意すべきである。上海の日本軍政当局による対ユダヤ政策が、ドイツの指示や介入とはまったく無縁のところで遂行されていたことの証左と見てよい。当時、上海海軍武官府特別調査部の部長の座にあった實吉大佐こそは、日米開戦後の上海におけるユダヤ居留民の処遇問題に決着をつけるべく、犬塚大佐の後任として送り込まれた人物であり、実際、業務日誌からうかがわれるとおり、連日、日本総領事館、陸海軍関係機関、興亜院、憲兵隊本部、楊樹浦一帯の警察署、そして各種ユダヤ団体の本部と既存の難民収容施設を訪ね歩いては、ユダヤ居留民の処遇について、綿密な調査と打ち合わせを重ねていた實吉大佐が、マイジンガーはおろか、現地上海のＳＳ幹部や非ユダヤ系ドイツ人の名前に一度も言及していないことから、トケイヤー、シュオーツが一切根拠を示さないまま描き出したように、1942年夏、上海の日本軍政当局が、マイジンガー以下、数名のＳＳ隊員を囲んでユダヤ絶滅計画を話し合ったなどという筋書きは、もはや純粋なフィクションと断定し、真摯な歴史研究の次元からは――あえて強い語彙を用いよう――「葬り去る」べき時期にいたった、と本稿の筆者は判断する。

次に、いささか意外なことに、1942年の初めには前任の犬塚大佐のもとで海軍武官府特別調査部の部員であったことが確かめられている柴田貢の名前が、實吉大佐の業務日誌には一度も現れない。この点については、業務日誌中、先立つ5月18日の記述が手がかりを与えてくれる。

［一九四二年］五月十八日　月　雨

○九○○　武官府定例会議　午后カセイ事務所　夜　京華に於て従来の特別調査部解散の宴あり

「京華」とは、上海の日本人居留民が贔屓にしていた中華料理屋であるが、そこで、實吉大佐の赴任から一ヶ月後、特別調査部の解散の宴席が設けられたという。つまり、1942年3月まで犬塚大佐のもとに結集していた調査部員たちが、いったん解雇され、新任の實吉大佐とのあいだで上司・部下の関係を築くにはいたらなかった事情がうかがえるのだ。おそらく實吉は、4月に上海に着任して以来、前任の犬塚大佐のもとで活動してきた調査部員の面々に、頼りなさ、物足りなさの感を禁じ得なかったのだろう。

仕事の方は中々目鼻のつく様なものではない。第一手足になる人間が居ない。［・・・］之れから手足となる人間から探さねばならない（妻・英子宛書簡、1942年5月10日）。

さらには實吉が着任して一ヶ月以上経てなお、日本軍政当局自体が、いまだ確たるユダヤ対策の方針を持ち合わせていなかった様子もうかがえる。

猶太に対し未だしつかりした方針が全体としてない。あまり同情するのも今の処出来ない。それで人の件も未だ考へ中。但し臼井君には人は二人ばかり頼んである（同6月10日）。

東京の海軍司令部、臼井中佐から二名の属託採用についてゴーサインが下り、實吉は、当初、現地採用も考えたようであるが、適任者が見つからなかったため、急遽、人選のための東京出張を願い出た(6月16日)。その結果、採用にいたったのが、「国際政経学会」の久保田勤と聖公会系のプロテスタント牧師、関屋正彦の二名である。

久保田勤と関屋正彦の採用

以下、實吉大佐の業務日誌中、東京出張の部分より——

［一九四二年］六月二十一日　［日］

一二三〇　長崎着（上海丸同室に同文書院大学教授　堀江義廣氏に嘱託候補物色方依頼し置く）　一四〇〇　長崎発　二〇三〇下関発富士にて上京

六月二十二日　［月］

一五・二五　東京駅着．英子　繁子　迎へに来る．一六三〇帰宅夜　嘱託物色に関し関屋氏来る

六月二十三日　［火］　雨

海軍省に出頭［･･･］午后　嘱託候補の件につき志賀直哉氏来訪．

六月二十五日　［木］　雨

午前　露語候補者　中山　及　英独候補者　日沖来る　前者良好　後者は欺瞞者なりき．［･･･］三時　大阪ビル　雅郎事ム所に至り　雅郎に会ひ　猶太問題並に嘱託につき依頼．

六月廿六日　［金］　雨

東洋協会にて赤池氏、増田氏（猶太研究大家）に会ひ　猶太問題を話し　候補者を依頼す［･･･］夜　三井物産人事部長　山田武雄氏邸に雅郎も来り　猶太問題　及　嘱託の件　話し合ふ

六月廿七日　［土］　雨

赤坂檜町　鈴木竹雄氏（帝大教授）を訪ひ候補者依頼　次で海軍局に至り赤池氏　増田氏　推薦の久保田氏に会ふ．［･･･］夕方英子同伴　関屋氏を訪ひ　嘱託問題を話す

六月廿八日　［日］　雨

新町に志賀直哉氏を訪ふ．外国語学校教授　中村氏も来り　候補者問題を話す　次で雨を冒し直哉氏案内にて目白　児島喜久雄（帝大教授）氏を訪ひ候補者を依頼す

次で日本クラブに至り　前以て打ち合はせ置きたる四王天（陸軍中将）氏に会ひ猶太問題を話す[4]．夜　関屋氏、候補者安藤氏を伴ひ来訪

六月二十九日　［月］　雨

海軍省、人事局に至る　久保田氏採用を決す　久保田氏を海軍省に呼び手続をなし　医務局に至り同氏の身体検査を行ふ

軍令部第三課長に猶太問題を話し　大阪ビルに雅郎を訪ふ

関屋氏来訪

六月三十日　［火］

早朝　関屋氏来訪．海軍省　久保田氏の手続　午后　関屋氏嘱託受諾[5]　再び海軍省に行く［･･･］

---

[4] 同日の四王天延孝の日記（四王天のご遺族所蔵）に以下の記載あり。「500前日本クラブニ至リ實吉海軍大佐ト600過迄上海ユダヤ問題［二字判読不能］人事諮問ニ応ズ」。

[5] 貴族院議員・関屋貞三郎（1875-1950）の同日の日記（国立国会図書館憲政資料室所蔵）に以下の記載あり。「正彦上海海軍武官府嘱託トシテ「ユダヤ」人ヲ［･･･］スル［･･･］ニテ［･･･］サレタル由　実吉氏ヨリ［･･･］アリト　余ハ不

七月一日　［水］

［･･･］午后　関屋家を訪ひ　夫妻に面談す[6]［･･･］

七月三日　［金］　曇

〇八〇〇　海軍機にて羽根田発　直行一六〇〇上海着

こうした記述から、この時の東京出張の目的が新たな特別調査部員の人選、採用であったことは明白であり、實吉が、みずからの任務のつつがない遂行のため、優秀にして、できれば英語以外の言語も操ることができ、人間的にも信頼できる人材を可能な限り広く物色した様子がうかがわれる。

久保田勤（1895-1975）については、これまで関根真保の先行研究により（関根 2010：107 以下）、それが「国際政経学会」の機関誌『猶太研究』に 1941 年 10 月から 1942 年 7 月まで「久保田通敦」の名で文章を掲載し、編集後記などで「久保田勤」の実名を覗かせている人物であることがほぼ確実視されていた。今回、實吉の業務日誌によりそれが完全に裏付けられ、加えて、彼を實吉に推挙したのが、元・警視総監にして貴族院議員、赤池濃（1879-1945）と、赤池も会員として名を連ねる「国際政経学会」の中心人物、増田正雄（1890-?）であったことも判明した。しかし、久保田の人物像については、依然、情報が著しく不足している

賛成ノ意ヲ表セリ」（［･･･］の部分、判読不能）。

[6] 同日の関屋貞三郎日記に以下の記載あり。「実吉海軍大佐来訪（目下上海海軍武官府勤務）正彦ヲ武官府嘱託ニ採用セルコトニツキ相談アリ　手続終了セル由ナル［･･･］ユダヤ人ノ世話ナリトノコトニテ反対センガ実吉大佐［･･･］好意［･･･］シ将来ヲ託シオケリ　正彦［･･･］相談アリテ賛成シ得ス［･･･］反対ノ意ヲ表シ置ケリ　実吉モ今日ノ談ハヤヽ委曲ヲ尽シ　正彦将来支那ニ［･･･］活動スル準備トシテモ［･･･］実吉氏ノ好意モアレハ余ノ反対スル［･･･］」。

といわざるを得ない[7]。

他方、関屋正彦（1904-1994）については、弟・関屋友彦が著した家族の評伝（関屋 2002：87 以下）により、その人物像を克明に把握することができる[8]。

関屋正彦は、台湾総督府、朝鮮総督府などで参事官を務め、のち貴族院議員となった関屋貞三郎（1875-1950）の長男として生まれた。一高、東大法学部、内務省というエリート・コースを歩む一方、幼時より母・衣子の影響でキリスト教に興味を抱き、中学の頃、日本聖公会に入信し、受洗していた。1929 年、長野県庁出向時代に内務省を辞し、聖職者の道を志す。1930 年、英国、ケンブリッジ大学ウエスト・コット・ハウス神学校に留学。1932 年に帰国し、北区滝野川に教会を開き、「一心塾」という学生塾も開設した。

1937 年、日本の中国侵攻に対する国際世論の批判が高まると、正彦は、外務省の要請により、英国教会の大主教や教会指導者に会い、日本の立場を直に説明する特使としてロンドンに派遣された。しかし、大政翼賛

[7] 本稿の筆者は、2017 年 11 月、久保田勤の孫に当たる方々との連絡にも成功したが、彼の経歴や人となりについて詳述できる唯一の人物であった一人息子は、2016 年に逝去し、また、久保田家が 1990 年、一度、落雷による火災で全焼したため、祖父・勤に関する資料はまったく残されていない、ということであった。孫の方々がかろうじて記憶に留めているのは、勤が早稲田大学政経学部卒であったこと（国立国会図書館所蔵『早稲田大学校友会名簿』、昭和 3 年ならびに昭和 14 年版には、確かに「久保田勤　専門部政治経済学科　大正六年　卒業」との記載がある）、上海では、日本の敗戦後、何者かにつけ狙われて身の危険を感じた時、以前から雇っていた中国人家政婦が屋根裏部屋に匿ってくれて事なきを得た、というエピソードを語っていたこと、そして、戦後は新橋の商事会社に勤め、公的な場での発言や活動は一切行っていなかったようである、といったものであった。

[8] 本稿の筆者は、関屋正彦、友彦のご遺族とも連絡を取り、上海時代の正彦に関する資料の有無を照会したが、関係する手記や書簡のたぐいは残されておらず、かろうじて海軍武官府時代とおぼしき正彦の写真を数枚見せていただくことができた。

になびく日本のキリスト教界に徐々に嫌気を差した彼は、1941年、聖公会牧師の任を辞す。實吉大佐率いる上海海軍武官府特別調査部の嘱託候補として声がかかったのも、ちょうどその頃であった。上に引用した實吉の日誌からもわかるとおり、1942年6月22日、大佐が東京に到着したその晩に、正彦は實吉家を訪っているが、そこには、つとに手紙により上海の實吉から事前の斡旋を頼まれていた妻・英子の采配があったようだ[9]。旧来、實吉安純と関屋貞三郎が昵懇の仲であり、實吉、関屋両家のあいだには、互いに媒酌人を務め合うなど家族ぐるみのつき合いがあった。上海の夫から手紙により候補者の心当たりを尋ねられた英子が、日本のキリスト教界に失望して聖公会を飛び出した正彦の身を案じて、彼を夫に推挙したものと思われる。

1942年7月、父・貞三郎の反意も押し切って上海に着任した正彦は、實吉部長と、年上の同僚、久保田ともども「無国籍避難民指定居住区」の開設に尽力する。1943年6月、實吉が上海を去った後、みずからの任務にも一定の区切りがついたと感じたのか、海軍武官府を辞し、8月23日、かねてより希望していたとおり、聖約翰（セント・ジョーンズ）大学（日米開戦後、日本がアメリカから接収したかたちとなっていた）に教授として迎えられている（池田1995：292）。

[9] 以下、妻・英子が上海の實吉大佐に宛てた手紙より。「あなたの手足となる方をお探しになる事。仰有る通りほんとうに信仰のある方に行って頂きたいと存じます。［･･･］関屋正彦さん（牧師さんで一心塾をしてゐる方）は若い学生に伝道をして入らしたのですからいい方があるかもしれませんから伺ってみませうか。」（1942年5月20日）「関屋さんに伺って参りました。関屋正彦さんもそういふお仕事には本当に日本人らしい信仰のあるしっかりした人に行って貰ひたいものだと云はれ、そして働き甲斐もありさうだなどと、わりに乗り気にはなってゐられましたが、さし当り誰も思ひ浮ばないから少し考へて見たいと云ってゐられましたので、お願ひして帰って来ました。」（同6月1日）

1945年8月の終戦後も、正彦はしばらく上海に留まり、日本人戦犯容疑者の弁護に当たる一方、貧困に喘ぐ地元中国人のための救済事業を再開した英・米のクエーカー教徒たちと行動を共にしている。1947年の帰国後は、東京、三田でクエーカーの「普連土（フレンド）学園」の再興に取り組むエスター・B・ローズ（1896-1979）に協力し（のちに校長に就任）、非暴力平和主義をモットーとする「友和会（FOR: Fellowship of Reconciliation）」にも加わって、その書記長を長くつとめた。1966年、ニュージーランド、マッセ大学が新設した日本講座に講師として招かれ、三年間、在職。1969年に帰国し、聖公会に復帰した彼は、仙台教区で司牧した（1973年、定年退職）。1974年（70歳）、立教高等学校が英国、ウエストサセックス・ラジウィックに創設した「英国立教学院」の校長として赴任（1977年まで）。晩年は、「紀尾井聖会」と称する聖書講読会を自宅で主宰し、1994年、89歳で他界する直前まで会を継続した。

1942年夏の出来事（続き）

1942年6月30日、久保田勤、関屋正彦の採用手続きを海軍省で完了した實吉は、7月3日、海軍機により羽田から上海に帰還する。久保田、関屋の二人も、それぞれ7月19日、24日に上海に到着。翌日から海軍武官府に出勤し、實吉のもとで任務を開始している。次頁写真の後列に写っている三名のうち、尾朝直定は、ロシア語担当として、1942年12月、日本から赴任し、残る二人は1943年に入ってから現地で採用された嘱託である。1942年夏の段階では、實吉、久保田、関屋の三人体制であり、その時すでに、柴田貢を含め、犬塚時代の部員は調査部を去り、それぞれの本業（柴田の場合は総領事館嘱託）の仕事に戻っていたわけである。

その上でなお、上海の日本軍政当局がなんらかのユダヤ政策を実行に移そうとしているとの情報を、ユダヤ組織の代表者たちに警告として伝えた日本人の一人が柴田貢であったことは、本誌前号の論文中にも引用した元ユダヤ人居留民たちの回想から疑えない（菅野 2018：82以下）。むろん、柴田が正確にどのような情報を彼らにもたらしたのか、今となっては知る由もないが、いずれにせよ、日頃から親しく行き来していたユダヤ人の友人たちの身の安全を案じ、最悪の事態も想定して、総領事館内で耳にした不穏な情報を伝えようとした、その柴田の友情心とヒューマニズムに疑問の余地はない。ただ、当時、ユダヤ人集団に迫っている実際の危険が、ナチスから示唆された絶滅政策などではなく、現実に翌1943年2月から実施されることとなる指定居住区への強制移住だったのであれば、当然、これまで一部で行われてきたような柴田の「義人」「恩人」としての顕彰のされ方も大きく変わって来ざるを得まい。

1943年5月28日　上海海軍武官府特別調査部にて（前列左から関屋正彦、實吉敏郎、久保田勤、後列左から尾朝直定、丸山平造、松崎芳治）写真提供：山本蔦子、二宮道世

しかるに、この「事件」をめぐる最直近の一次資料たる實吉文書から

は、この時、上海ユダヤ組織代表者の一人でドイツ出身のローベルト・ペリツを中心とし、ユダヤ居留民たちが何を恐れ、いかなる対策を講じようとしたか、はっきりとうかがい知ることができる。彼らは、おそらく柴田貢を筆頭に、軍政当局の対ユダヤ政策について情報を得られる立場にあった日本人たちから、遅かれ早かれ、上海のユダヤ居留民を全員一ヶ所に集中させる段取りが進められているとの情報をつかみ、それを事前の「抗議書」などによって阻止――仮に阻止が無理でも実施形態をできるだけ穏和化――しようと試みたのだ。

しかし、当の實吉大佐と日本総領事館にとって、これは「秘密漏洩」にほかならなかった。というのも、実際、上海の日本軍政当局は、日米開戦以来、アメリカ人、イギリス人、オランダ人など敵性外国人同様、ユダヤ住民も、いつまでも野放しのまま上海各所に自由に住まわせておくことはできない、との判断から、指定された居住地に彼らを集住させて監視する、という施策をすでに検討し始めていたからである。そのことを漏れ聞き、各方面に触れ回るペリツの挙動は、やはり「秘密漏洩」に当たるとされ、そこで實吉大佐は、わずか10日ほど前に日本からやって来たばかりの部下、久保田勤に命じて、ペリツに戒告を与えなければならなかった。

すると、その週末、實吉、久保田、関屋も知らないあいだに憲兵隊が動き、この「秘密漏洩」に関わったとされるユダヤ人代表者数名の身柄を拘束した。週明け、そのことを知った實吉は、憲兵隊に足を運び、ユダヤ居留民担当部局の長として、彼らの逮捕理由を確かめた、という事の経緯が、上に引用した實吉文書から明らかとなる。

別に見つかったリングファイルには、この時の顛末について、實吉大佐の手で次のような覚え書が記されている。

17-8-27　特陸司令部
8月17日ソ聯使節団首領ドルビシハ上海ソ聯総領事館ニ於テソ聯籍ユダヤ人団代表ト会見セルモ其ノ後ノ発表セル談話ニヨレバ日本ノ中国占領地域内ニ於ケル反ユダ法制ノ実施ハ一種ノ虚偽的流言ニ過ギザルモノニシテ［一字不明］テ日本当局ニ逮捕サレタルユダヤ人首領ノ数名ハ政治問題或ハ日本人対ユダヤ人ノ施行方策等ノ問題ニ干渉セルモノニ限ラズ　［一字不明］犯罪累々ナルガ為検挙サレタルモノニシテ上海市ソ聯ユダヤ人団体代表 B. Topas, Schefrin 及 Hessin ノ三名ハ救済欧州ユダヤ難民国際委員会主事 Peritz ノ後援ニヨリ日本当局ニ対シ上海市ユダヤ難民ヲ救済センガ為メ右委員会ノ在銀行預金ノ引出許可方ヲ申請セシ為日本当局ハ Spilman［正しくは Speelman］ヲ保証人トシテ在銀行預金 75.000 米弗ノ引出許可ヲ受ケタルモ其ノ後 Topas ハ其ノ友人達ト共謀シ右公費ヲ私用シ投機事業ノ経営費ニ費消セル為日本当局ハ遂ニ Topas ヲ始メ其ノ共謀者ヲ逮捕スルニ至レルモノナリ.

つまり、この時、憲兵隊に拘引されたユダヤ組織の代表者たちは、日本側の対ユダヤ政策に干渉しようとしたに留まらず、かねてより、彼らがユダヤ組織の公金を私的に流用している疑いが浮上していたため、この機に身柄を押さえて取り調べることにした、という経緯説明が、後日、「特陸（上海海軍特別陸戦隊）」司令部からあったというのである。もちろん、彼らが本当に公金流用などに手を染めていたのか否か、真相は不明であるが、ここに名前が掲げられているペリツやトパーズは、その後も、實吉大佐の業務日誌に頻繁に登場し、種々のやり取りをしながら、

可能な限り穏便な仕方で指定居住区の設置に向けて協働していくわけであり、決して、この「事件」によって犯罪者扱いされたり、實吉大佐率いる特別調査部との関係を悪化させたりしたわけではない。

興味深いことに――当事者の立場からすれば当然かもしれないが――、この時、逮捕されたペリツを含め、数人のユダヤ居留民が戦後になって書き残した回想や証言では、憲兵隊による身柄拘束の理由が公金流用の嫌疑であったことなど一切触れられておらず、もっぱら、柴田貢などから秘密裏に取得した、なんらかのユダヤ政策の実行案に関する情報を拡散したという理由で逮捕、拘禁、そして人によっては拷問を受けた、とされている。あたかも、日本当局が、いかにしても極秘裡に遂行せねばならない兇悪なユダヤ対策を立案中であり、その事実が洩れそうになったため、躍起になって情報漏洩ルートを絶とうとした、といわんばかりである。そして実際、トケイヤー、シュオーツの共著では、その種の対策が「絶滅計画」として実在し、それをリークした柴田が「さんざん体罰をうけたうえ二度と中国大陸を踏んではならぬとの厳命つきで日本へ送還され」（トケイヤー／シュオーツ 1979：219）、ユダヤ代表者たちも、その知ってはならぬ計画を知ってしまったという理由で、厳しい訊問、拷問に付された、という筋書きになっている。

しかし、上海の日本軍政当局のいずこかの部署でユダヤ居留民の身に危害を加えようとする計画が立案中であったにもかかわらず、対ユダヤ政策の総括者として送り込まれてきた實吉大佐がそれを知らなかった、という事態はおよそ考えられない。そもそもトケイヤー、シュオーツの共著によれば、この時、マイジンガーを囲む秘密会議に出席し、彼が提案する絶滅計画に大いに食指を動かしていたとされる久保田勤は、実際のところ、上海に到着してまだ数日しか経ておらず、右も左もよくわか

らないうちから、噂をもとに「抗議書」などを作って持ってきたペリツに「戒告」を与える役目を實吉大佐から任されているのだ。

「絶滅」をめぐる三つ巴の想像界

こうして筆者が、實吉文書の発見前、本誌前号に掲載した論考のなかで結論づけていたように、戦時期、日本軍政下の上海に滞在・滞留していたユダヤ住民を亡き者にしようとするナチス式の絶滅計画が何らかの意味で「存在」したとしても、それは、（一）1942 年の夏ならずとも、マイジンガーを筆頭として確かに上海にも出没していたＳＳ幹部たちの禍々しい発想と乱暴な発言、ならびに（二）そうした発想・発言にことさら同調してみせることにより、上海ユダヤ住民の処遇についてより厳格な措置を軍政当局に講じさせようとした一部の日本人の暴言のたぐい、そして（三）それらについて飛び交う噂を耳にした当のユダヤ住民たちが、ヨーロッパから断片的に届く身の毛のよだつような情報との兼ね合いにおいて、当然、抱いても無理はない恐怖心、これら三つ巴の想像界のうちに宿っていたのであり、ドイツ側からマイジンガーなどを介して日本軍政当局に持ちかけられ、日本側も受け入れ寸前まで歩を進めた現実の計画などとしてではなかったという結論が、今回、實吉文書によっても強力に裏付けられた。

加えて、上に述べた（二）に相当する部分、すなわち、ナチス流の仮借なき政策を日本当局も採用すべき、などとして一部の日本人たちの口からも吐かれていたとおぼしき暴言に関しては、實吉家に保存されていた銀のシガーケースのなかから発見された、実に興味深いメモ書きがある（以下、「／」は原文中で改行が行われていることを示す）。

実吉敏郎海軍大佐／昭和十七年／上海在勤海軍武官府／特別調査部部長

ユダヤ人の事につき東京に帰り赤池警視総監に相談／久保田勤氏推選［ママ］さる　避難民事ム所所長

欧州からにげて来るユダヤ人約七千名／連合軍軍事警察にスパイ情報を流す／ユダヤ人独特のトリックで経済をかくらんする／食糧事情その他で彼等の処分を協議

○ボルネオにやるか、○浦東（フートン）という島にとじこめるか　○又はどろ舟作戦にして海に沈めるか。これはすでに欧州でナチスがやっている。アメリカが参戦を決意するきっかけとなった。

久保田氏はそれらの事情にくわしかったのでそのような国際的信義に反する事は絶体［ママ］するべきでないと主張する。日本がしている大東亜戦争の世界がゆうわするという大目的に反する。／実吉大佐は、国際的センスのある方でしかも大きな人類愛を持っていられる方なので久保田氏の主張を全部うけ入れて下さった。／もしも他の人が部長をしていたらどうなったか分らない。どろ舟作戦などしていたら戦後日本は世界中からどのような事をいわれたか分らない。

実吉大佐と相談して、彼等に上海に居住地を与え、集中しておいて保護と監視をつゞける。／ひかく的ゆるやかに待遇したので大変感謝される

戦後米軍のキャプテン　シューメーカーという人が上海を視さつして非常によく心切［ママ］にしてやったとほめられる。そのためか、一人の戦犯も出なかった。／マッカーサーにも報告され、久保田氏は感謝される。

これはおそらく、1943年6月、任地を後にする大佐に上海のユダヤ団体から感謝の品として銀のシガーケースが贈られることになった経緯について、實吉・元大佐から説明を受けた三女・蔦子氏が、その由来を子孫たちに伝え残すために書き付けたものと思われる。

本稿の筆者にとって、このメモ書きの内容は大きな驚きであった。というのも筆者は、当初、仮に實吉大佐の周囲に反ユダヤ主義の言辞を弄する人物がいたとするなら、それは「久保田通敦」の筆名をもって東京の「国際政経学会」でさかんに反ユダヤの論陣を張り、ある座談会の席でも――

> 大掃除みたいなもので、ドイツといふ國からユダヤといふ塵を追出す。しかしこつちが綺麗になつたところが、向ふ側に行く。結局それを処理する共同塵芥捨場、さういつたものがどうしても必要になるわけですね[10]。

などという不穏な発言を放っていた久保田勤その人ではなかったか、と推測していたからである。

しかし、この蔦子氏のメモ書きからは、確かに實吉大佐の周囲に、「どろ舟作戦にして海に沈めてはどうか、ナチスはすでにそんなことをやっている」などという言辞を弄する日本人がいたことが察せられるものの、それが久保田勤であるどころか、むしろ久保田は、その種の発想の主に対して厳しい批判の目を向け、上司の實吉大佐にも、日本は、国としての信義にかけて、そのようなことは絶対にすべきでない、との私見を述

[10] 「座談会　時局とユダヤ問題」、『猶太研究』、1941年9月号、113頁。

べていたというのだ。

> 政経会［国際政経学会］の雑誌［『猶太研究』］は極端な反ジューで読むと気持が悪くなる．久保田氏は議論ではエライ反ジューだがナマの猶にぶつかると大して無理はしない．コチラがそう云ふ主義でやる様に宣言して置いたためかもしれない（實吉大佐から妻・英子への書簡、1942年9月8日）

> 久保田氏は猶太のケイカイすべきは財界の有力者で当地の無一物［ママ］のユダは之と趣を異にして居るとの意見であり、当地の彼等に対する久保田氏の態度は却つてこちら［實吉自身］より同情的でもある（同10月5日）

まさに、歴史研究において予断は禁物との教訓である。また、人間の思想と行動、あるいはイデオロギーとプラクシスのあいだのデリケートな干渉地帯の所在を示しつつ、ある人物の脳裏において、日頃、言葉や観念によって組み立てられていることと、実際に生の現実にぶつかった時、体や感性が示す反射とが、必ずしも一致しているとは限らない、ということの好例でもあろう。

予断こそ慎みながら、状況の中で想像力を働かせてみるならば、1942年7月末、柴田貢は、知己のユダヤ居留民たちになんらかの情報提供を行うに際し、彼自身はお役御免となった特別調査部の新しい部員として日本から久保田勤がやって来た、という情報をつかみ、そこで、この人物が反ユダヤ主義の論壇を主導する「国際政経学会」の一員であり、筋金入りの反ユダヤ論者であることを、あわせて警告として発したのかも

しれない。ところが皮肉にも、その種の警告を深刻に受け止め、ささやかれている日本当局による苛酷なユダヤ対策について「抗議文」をもって海軍武官府に乗り込んだペリツは、ほかならぬ、その久保田から、「あらぬ噂を根拠に騒ぎ立てるものではない」として「戒告」を受けているわけだ。

加えて、翌1943年2月、「無国籍避難民指定居住区」の設置に漕ぎ着け、みずからは6月に洋上勤務に戻ることとなる實吉大佐が、「無国籍避難民処理事務所」の所長に久保田勤を据えた、という点も、今後の研究に向けて、きわめて重要な意味をもつ。これをもって、従来、実に多くの元ユダヤ居留民たちの回想録に記されてきたように、「避難民処理事務所」所長の久保田が、常に強硬かつ冷酷な反ユダヤ主義者として任に当たっていた、という記述の信憑性、史実性も、再検証を求められることになるからだ。

結論

本誌前号の拙稿に続き、今回発見された實吉文書の解読からも、1942年7月末、上海のユダヤ人代表者たちが恐れ、阻止しようとしたのは、絶滅計画などではなく、翌1943年2月、実際に施行されることになる指定居住区への強制移住政策であった、と考えて間違いない。むろん、指定居住区への強制移住政策は、同時期のヨーロッパで繰り広げられていたナチスによる絶滅政策に比べるならば、はるかに「微温的」であったといえようが、それでもなお、当の上海ユダヤ居留民たちには、ドイツと同盟関係に入った日本が何らかの施策を講じようとしているらしい、との噂だけをもってして、ヨーロッパから断片的に漏れ伝わってくるナチスの残虐行為に匹敵する何かが、日本軍政下の上海でもこれから行われようとしている徴候ではないか、との恐怖心を抱かせて余りあるものであった、ということだ。

今後、われわれは、今回、奇跡的にも発掘された實吉大佐の業務日誌の批評校訂版を作りながら（望むらくは日英二語対照版として）、1943年2月、「無国籍避難民指定居住区」設置の経緯を明らかにしていかなければならない。それに先立ち、1942年夏、マイジンガーほかＳＳ幹部による絶滅政策提言といった通説は、やはりフィクションの域を出るものではなかったことを確認し、他方、現実に進行中だった「指定居住区」への強制移住計画が、すでにそれだけで当のユダヤ居留民たちから絶望的未来の前触れとして、心底、恐れられていた、という点を正確に踏まえながら、上海ユダヤ居留民社会を包み込んでいた「空気」の再構成に、可能な限り努めていく必要がある。

査読者：市川 裕・細見 和之

＊本研究はJSPS科研費、平成29～令和2年、基盤研究(C)(1) 課題番号17K02041の助成を受けたものである。

文献

池田 1995：池田鮮『曇り日の虹――上海日本人YMCAの40年史』、上海日本人YMCA40年史刊行会、1995年。

犬塚 1982：犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作――海軍・犬塚機関の記録』、日本工業新聞社、1982年。

菅野 2018：菅野賢治「日本軍政下の上海にユダヤ絶滅計画は存在したか

——柴田貢とヨーゼフ・マイジンガーの周辺」、『京都ユダヤ思想』、第 9 号、2018 年 6 月。
関根 2010：関根真保『日本占領下の「上海ユダヤ人ゲットー」—「避難」と「監視」の狭間で』、昭和堂、2010 年。
関屋 2002：関屋友彦『私の家族の選んだ道』、紀尾井出版、2002 年。
トケイヤー／シュオーツ 1979：マーヴィン・トケイヤー、メアリー・シュオーツ『河豚計画』（原著 1979 年）、加藤明彦訳、日本ブリタニカ、1979 年。
Ito 2015 : Keiko Ito, *My Shanghai, 1942-1946. A Novel,* Kent, Renaissance Books Ltd., 2015.

Was there a plan for Jewish extermination in Shanghai under Japanese military rule? (continuation and conclusion)

—Investigation into the unpublished documents of the Naval Captain Toshiro Saneyoshi—

Kenji KANNO

In previous work on this subject, I suggested that the 'Shibata Affair' during the summer of 1942 in Shanghai, could have taken place in a completely different way to that described in *The Fugu Plan* (1979) by Marvin Tokayer and Mary Shwartz and reproduced since then in numerous writings on the Jewish residents in the Far East during the World War II.

Shortly after my completing the article (October 2017), a fortuitous coincidence allowed me to discover unpublished documents of the Naval captain Toshiro Saneyoshi (1886-1973), who led the Special Investigation Department in the Naval Attaché's Office in Shanghai from April 1942 to June 1943. His task was nothing less than settling Jewish issues properly in the post-Pearl Habour context. And his diaries, written in Japanese and in English, and the letters to his wife in Tokyo cover the complete range of his Department's activities.

Analysis of these newly obtained documents clearly demonstrates that some Shanghai Jewish community leaders seriously tried to abort, not a Josef Meisinger's fictional extermination plan, but a real initiative of forced relocation to a specific area. At the time, Saneyoshi was indeed pursuing this measure along with his two subordinates, Tsutomu Kubota (1895-1975) and Masahiko Sekiya (1904-1994).

A critical and multilingual edition of Saneyoshi documents is to be hoped for further in-depth historical research on the relationship between the Shanghai Jewish community and the local Japanese authorities.